

あとがき

今回の展覧会はマックス・エルンスト Max Ernst (1891～1976)の1910年から1946年に至る作品、すなわち油彩を中心にガッシュ、水彩、フロタージュ、コラージュ、写真等を交え20点を展示しご覧に入れるものである。別表1にエルンストの展示作品について制作年代(年齢)別手法別リストを作成しているのをご参照いただきたい。このリスト、カタログの作品写真と併せ前掲のエルンストの年譜をご覧いただくと、作品創造の背景が浮かび上り興味深いものとなる。そこでもう一度作品そのものをご覧いただければ、興趣はさらに一段と深まるものと思うのである。

この展覧会のカタログテキストは詩人の大岡信さんと東京国立近代美術館の松本透さんをお願いし、“エルンスト——「無私」の方法的実践”ならびに“夢がみている——エルンストにおける「イメージ」——”と題するエッセーをご寄稿いただいた。お二人に厚く御礼申し上げる。なお、カタログNo.5“入る、出る”(エリュアール邸のドア)でポスターを作成したことを申し添える。

この展覧会の内容はカタログをご覧のとおりであるが、整理して特徴的な点を挙げると次のとおりである。第一はNo.20の大作を除きすべて戦前の作品で、アメリカへの亡命前に作成されており、エルンストの青、壮年期の作品で占められていることである。第二にモチーフにおいても手法においてもエルンストの原型がすべて含まれていることである。すなわち、森、太陽、鳥、貝の花、マスク等エルンスト特有のモチーフが示されていると同時に、フロタージュ、コラージュ、デカルコマニー、それらのミックス等エルンスト独特の手法がみられることである。このような油彩・ガッシュ中心の展示は1977年の西武美術館、兵庫県立近代美術館の展覧会以後初めてのことである。画廊ベースとしては本邦初ということになるか? エルンスト、シュルレアリスム、そして現代美術の愛好家の皆様にはきっとご満足いただけるのではなかろうかと秘かに私は思っている。

マックス・エルンストの芸術については大岡さんと松本さんのエッセーをお読みいただければそれで足りるのであるが、エルンストファンの私として一言述べさせていただきたい。周知のように20世紀の美術は二つの大きな潮流によって動いている。すなわち抽象絵画(アブストラクト)と超現実絵画(シュルレアリスム)

である。この二大潮流を否定することは今世紀の絵画を否定するに等しい。その超現実絵画の第一人者がマックス・エルンストである。ミロ、タンギー、マグリット、デルボア等シュルレアリスムのすぐれた作家のなかで、エルンストはもともと硬質で、無機的で、イメージの輝きに満ちている、というのが私の実感である。

彼の年譜をみてみよう。彼はケルンの近郊ブリュールに1891年4月2日に生れ、1976年4月1日、パリで亡くなった。なんと85歳の生涯を完全に余すところなく生き、その生を了えた。これは常人の一寸マネのできないところである。魔術的だなと感嘆する。

エルンストは同時代のすぐれた作家との交友が目につく。すなわち、マッケ、アルプ、エリュアール、ジャコメッティ等々である。特に詩人エリュアールとエルンストとの友情はきわだっている。エリュアールはエルンストの絵を買い求め、彼の生活を支え、エルンストとブルトンとのけんかの仲裁をし、二人で南印度支那を旅行し、収容所に入ったエルンストを救い出し、第二次大戦が終るや否やパリのドニーズ・ルネ画廊でエルンスト展を企画開催している。(私は今度パリでマダム・ドニーズ・ルネに逢ったらこの辺の事情を聞いておこうと思っている)。この友情のあかしが、この展覧会に展示されている“Entrer, sortir”カタログNo.5で、これはエルンストがポール・エリュアール邸のドアに油彩で描いたものである。この作品は戦火をくぐり抜け無事保存されて、1969年パリのアンドレ＝フランソワ・プティ画廊で展示された。面白いことにこのプティ画廊はドニーズ・ルネ画廊の確か一軒おいて隣りであったと記憶する。

ところでカタログNo.13“森と太陽”の持つエピソードも興味深い。瀧口修造先生はこの作品について次のように述べておられる。「この作品はフランスのシュルレアリスム運動との交流の記念といってよく、1937年6月、銀座の画廊“日本サロン”で催された“海外超現実主義作品展”のためパリ・グループから直送されて来たもののひとつである。(主催は春鳥会、今の美術出版社の前身、大阪の三角堂画廊で同年8月開催された)。私はこの展示には終始付き添い、関西にも出掛けて行った。この作品は京都の某氏の手渡ったはずだが、よくぞ戦火を越えて残ってくれたと思う。私としては40年ぶりの再会である。私事ながら或る絵の辿った歴史の一端として書き留めて置きたい。……」(南画廊'75年展1975年4月カタログ)。この作品はW.シュピース編集のカタロググレゾネには当然のことながら収録されていない。

シュピースさんがこのことを知れば驚くだろうと思う。恐らくこの作品はわが国に最初にフランスから将来されたエルンストの作品だと推測される。

私とエルンストとの付き合いは長い。勿論私は生前のエルンストと逢ったことはないから、私からの一方的な付き合いであるが、それだけにイメージも広がりが深いのである。最初にエルンストを意識したのは旧制高校の3年生20歳の時で、金沢の香林坊の本屋で求めた美術雑誌にエルンストの「聖アンソニーの誘惑」の粗末なカラー写真をみて心を動かされたのがはじまりである。時に昭和23年春、戦火は止んだばかりで、加賀百万石とは言え食べ物は不自由な時代であった。時は移り変わり、私は自分で画廊を開く仕儀と相なったが、その第一回目の企画展がエルンスト・タンギー版画2人展であった。以後別表2に示すとおり当画廊ではエルンスト展を今回で7回開催している。雀百まで何とやら、と言うが、まあそれに近い。今年で私の画廊はまる10年になる。これを記念して何か面白い展覧会をと考え、2年前からこのエルンスト展を計画したのである。ただいまこうして具体的に計画が実現することとなって私としては感慨一入のものがある。

この展覧会開催に当って多くの方々のご協力を得た。第一にわが国のコレクターの方々から、貴重な作品を心よくお貸しいただいたことに対し厚く御礼申し上げます。第二に、パリのウェルナー・シュピースさんから初期の貴重な作品を2点お貸しいただいたのは思い掛けないことでうれしかった。シュピース博士はエルンスト研究の第一人者で、エルンストの作品カタログレゾネの編集者であり、わが国で過去2回開催されたエルンスト展の企画編成者で、そのカタログのテキストを書いておられる。シュピース博士のご好意に深謝するものである。最後になったが、ベルリンのディーター・ブルスベルクさんの協力がなければこの展覧会は成立し得なかった。ベルリンと東京という時空を超えて、エルンストに対する共感が、この展覧会を現実のものとした。すばらしいエルンスト展をお膳立てしていただいたブルスベルク氏に深甚なる謝意を表するものである。ありがとうございました。

1988年4月10日

佐谷画廊

佐谷和彦